

かゑらんとかねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第138号

令和3年12月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

11/9 公開講座「楠正行の生涯を学ぶ」第3回

正行、河内東条平和の時代

＝ 近衛経忠の藤氏一揆、親房の主戦論という内憂外患 ＝

吉野朝 唯一の武将、正行時代

第3回は、河内東条平和の時代と銘打ち、正行14歳から21歳の頃を取り上げます。

この時代を概観しましょう。まず吉野朝の概観ですが、伊勢からの奥州・東航作戦で北畠親房は奥州へ向かい、そして後村上帝が即位をします。吉野朝には洞院實世や四條隆資らの公卿はいましたが、北畠顕家、新田義貞ら討ち死に後、主だった武将は全く不在で、唯一、正行のみの状態でした。

そして、北畠親房は東国経営に行き詰まり、高師冬の包囲・攻勢を受け、大宝城・関城が陥落、吉野に戻り主戦論の急先鋒となっていくます。

一方、同時期、和睦論者の近衛経忠が仕掛けた藤氏一揆は東北

武士を巻き込んだ内紛に発展します。近衛経忠は、村上源氏の北畠親房を封じ込め、奥州の小山氏、小田氏、結城氏らに藤氏同盟を呼び掛け、北朝への和平工作によって南北両朝の和睦を計画し、政治工作によって吉野朝の苦境を救おうとしたのです。しかし、頼りとした小山氏

の敗北を受け、左大臣を辞し、失脚し藤氏同盟は幻に終わります。

正行も和睦論者でしたから、一見、同じように平和裏に鎌倉と妥協を図ろうとする近衛経忠の藤氏一揆＝政治画策には大いに翻弄をされたのではないかと思います。

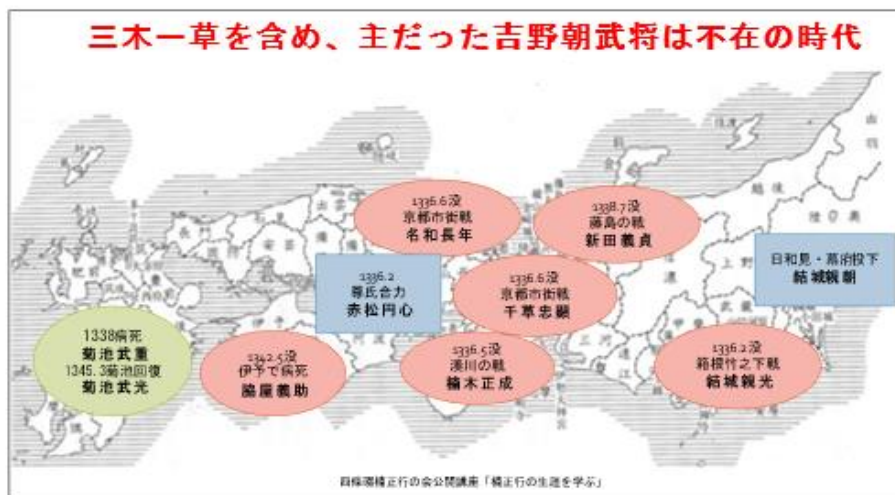
北朝 尊氏・直義の二頭政治時代

次に幕府の概観ですが、1336年10月に幕府の政治理念となる建武式目を制定し、1338年8月には足利尊氏が

征夷大將軍、弟の直義が左兵衛督に昇り、尊氏は高一族ら武闘派を従え軍事を掌握、直義は上杉氏ら文治派を従え政務を担当、俗に言われる「二頭政治」の蜜月時代・幕府草創期を形成していきます。

尊氏は征夷大將軍として肝心の権限は握るものの、ほぼ幕府の運営は直義に委ねるという二頭政治を、洞院公賢は圓大曆の中で、“直義は今や「天下執権人」だ”と記しています。

そして、尊氏・直義の二頭政治の影ともいえるのが、後醍醐天皇の鎮魂・慰霊でした。夢窓疎石は、「人力で天



四條畷楠正行の会公開講座「楠正行の生涯を学ぶ」

災を除くことは無理があります。後醍醐帝が吉野を出られて嵯峨野龜山行宮に入られる夢を見ましたが、その後まもなく崩御されました。何卒ここに一寺を建立され、後醍醐帝の菩提を弔われますように。そうなされば、天下は静謐になる事疑い有りません。」と献策、尊氏は直ちに造宮に取り掛かり、1344年に天龍寺は落慶します。

高師冬による東征と奥州制圧が進み、1344年に師冬は京に凱旋し、天龍寺での後醍醐帝供養式典を終えますと、内憂に一区切りをつけた尊氏・直義は南進＝楠討伐に動き出すことになります。

そして、この頃、吉野に戻った親房の主戦論が吉野朝廷の前面・トップに登場し、九州にも檄を飛ばし、熊野や瀬戸内の水軍を動かすなど対決の構図は否応なしに高まっていくのです。

① 親房と正行の確執

そして、正行の河内東条平和の時代の最大テーマは、北畠親房の主戦論と正行の和睦論の確執にありました。

公家優越武家蔑視の急先鋒、親房は尊氏を評価し過ぎたと後醍醐天皇を批判するぐらいですから、吉野朝の復権は北朝打倒のみと、奥州がだめでも九州征西宮、菊池一族に期待し、正行の和睦論を封じ込めていくのです。

父の遺訓を護り正統な吉野朝復権を目指す正行は、父正成も評価した尊氏との和睦も選択肢と、その和睦実現に向けた条件整備としての軍事力の強化に努めます。しかし、吉野朝廷軍の総大将とはなりえず、親房の主戦論に抗しきれず、一武将として前線に立たされ、最後は討ち死に覚悟の四條畷の戦いへと進むのです。

親房の主戦論は、何よりもその家門意識や武士観に裏打ちされ、吉野朝の正統性を明らかにした「神皇正統記」を記し、東北武士の中であって抜群の家柄と言える結城家、とりわけ結城親朝宛に宛てたとされる72通の「関城書」を送り続けたことでも理解ができます。しかし、東国で挫折をした親房は、命からがら吉野に戻り、策謀家へと変貌、最後は正行に対して、「お前は何をぐずぐずしているのか。父、正成は湊川において身命を惜しまず忠節をつくしたではないか。父の死を無駄にするのか。」と死地に追いやったものと考えます。

親房は、結城親朝には熱烈な心情を吐露した72通もの書状を送り、あの手この手で合力を頼っていますが、伝統的な身分や家格を重んじ、門地の高さは天皇への忠誠

の深さと表裏一体と、河内の一豪族に過ぎない正行を低くみた家門観を示すように、正行に書状を宛てた記録は残っていません。逆に、正平3年1月5日、四條畷の合戦で正行が破れますと、翌6日には、後事を議せんと和田一族を召し集めようとする書状を発しているにつけ、親房に死地に追いやられた正行の不憫を思わずにはいられません。

② 正行を悩ませた藤氏一揆

そして、河内東条平和の時代の次なるテーマは、近衛経忠が仕掛けた藤氏一揆でした。

近衛経忠の藤氏一揆＝藤氏同盟は、興国2年1341の春から興国4年1343末に至るほぼ3年間の動きで、正行16歳から18歳、吉野朝の官途につき、後村上天皇を支えて自らの力を蓄えていく、大変重要な時期と重なっています。

近衛経忠は、武家方＝北朝への和平工作によって南北両朝の和睦を計画し、いわば政治工作によって吉野朝の苦境を救おうとしたものでした。親房の主戦論に対し、和睦派＝講和派といえる立場で、あきらかに吉野朝に対する分派行動であり、村上源氏の流れをくむ親房への反旗でもありました。

しかし、この藤氏一揆も、興国4年6月、結城親朝が北朝に降り、この年11月に入ると高師冬の攻勢が一段と強まり、春日頭国・興良親王の護る大宝城が陥落し、続いて大宝沼を挟んで立地する関城も陥落、頼りとした藤原氏一族の雄、小山氏の敗北を受け、結果、左大臣を辞し

失脚をしています。和睦論の正行を悩ませた藤氏一揆は幻に終わったのです。

この藤氏一揆は、今まであまり取り上げられることはありませんでしたが、史料の極めて少ない正行を知るうえで避けて通れない事績と言えます。正行16歳から18歳、ようやく第1期戦乱の時代も収まり、官途について吉野朝廷を支えながら、自らの力を蓄えていこうというまさにそのような時期に、吉野朝廷内部の主戦派と和睦派の対立抗争に悩まされるのです。

主戦論・親房には尻をたたかれ、和睦派・経忠には助力を求められ、吉野朝廷唯一ともいえる武将だった正行は、大いに悩まされ、神経をすり減らしたものと想像します。

河内東条平和の時代にあって、この藤氏一揆の騒動は、正行が精神的に大きく飛躍する土壌＝舞台でもあったと思います。 (文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭)

